

## ◇ 国 語

国 6-1～国 6-18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

おそらく人間がその想像力によってつくりだしたフィクションの最大の傑作は、神であろう。一神教の神にしる、多神教の神々にしる、半ば神のような存在としての精霊や祖霊にしても、そうである。それらの観念のおもしろいところは、人間がつくったものでありながら、逆に人間は、それらによって見られていて、自分の行動の善悪をそれらによって判定されていると感じてきたことである。判定の結果によっては天国へやられたり地獄に落とされたりもすると、本気で人間は心配してきたのである。神あるいは霊とは、人間を見ているはずのものなのであり、人間は自分を見てくれているものを必要とするから、神や霊という観念を生み出したのである。

人間の道徳心を支えてきたのは神への信仰であると、各種の宗教の信者たちは考えてきた。宗教を信じない者がかならずしも不道徳とは限らないという事実からみて、その考え方は全面的に正しいとはいえないと思うが、少なくとも宗教が道徳の巨大な支柱の一つであった事実はだれにも否定はできないであろう。もちろん、非行を罰する法律や規則によって人に道徳を強制することはできる。

ア、法律や規則の監視がとうてい及ばない場においてさえも、人は悪いことをすると良心がとがめる。この良心とは、宗教の信者の場合は神に見られているという感覚である。だれも見えていなくても神が見ていると感ずるのである。ある種の人びとは、なにもむくいられることがなくてもジハツ的に善をなそうとする。だれもそれを知らず、したがってだれからもほめられることはなくても、神は見えており、喜んでくれると感ずるからである。神が見えて、あらゆる行動についていずれ賞罰が与えられるという感じが、宗教の信者にとっての良心である。

宗教の信者は、とかく、信仰だけが良心を形成するのだと考えたがる。だから信仰のない者や、まちがった信仰、すなわち自分のとはちがう信仰をもつ者には良心はないと考えやすい。しかし、信仰のないものにも良心はあるのである。では、それはどこからくるか。フロイトは、父親の権威が人の幼児期にその心に植え込まれて良心になるのだと説明した。宗教で良心が形成されるのも、神を権威として心の底深くに受け容れることだと考えれば、フロイトは神と父親を、少なくとも幼児にとっては同じ

ような存在だと説明したことになる。アットウ的な權威をもって善と悪の区別を教え、その区別を理解したかどうかを強烈な視線で見守り、自在にほめたり罰したりして、善悪の判断すなわち良心を子たちの心に植え込んでくれる。なるほど父親は神に似ている。

しかし、この説明も不充分である。父親なしに育った者は良心に欠けるとはいえないからである。フロイトやその解説者は、その点に気づいて、この場合の父親とはかならずしも現実の父親ではなく、父親のような役割を果たす者のことであるとつけ加えることを忘れない。イ、母ひとりで育つ子どもは母親が父親のようなこわい存在を兼ねることになるというわけだ。しかし、そのホソク説明はちよつとむりではなからうか。甘い一方の母親と、なんの權威もないような父親の子にだって良心は形成されうるからである。両親がともに甘ければ子どもはかならずだめになると断言できるだろうか。そんなことはいえないと思う。

信仰が良心をつくるのだろうか、父親が良心をつくるのだろうか、父親を兼ねた母親が良心をつくるのだろうか、それらはいずれも良心の重要な源にちがいないが、そもそもそれだけに限定するのは「見が狭い」と思う。人が見守られているのは、神や霊からだけではない。また幼児期の權威ある父親の記憶からだけでもない。日本人なら父親以上に母親から見守られていると感ずるのであるうし、おとなになつてからでも、父親には反抗できても母親を悲しませることはできないという人は多いだろう。親たちだけでなく、兄弟姉妹、親戚、近所の人びと、友だち、教師、母校、会社、さらには国家が自分を見守っているという感覚をもつ人もいる。

神に見守られているという感覚が人間の良心のもつとも強力な構成要素であつたという事実は否定できないし、尊重すべきだが、全世界的な規模でそれが衰えつつあることも事実である。神の代理人として幼児に權威というものの原型を叩き込むような父親というものも、昔は多かつたらしいが、いまではこれも全世界的にホウケン<sup>三</sup>的あるいは權威主義的なものとして否定されつつある。ウ、人間の良心を形成するものはなくなつてしまふのか。私はそうは思わない。人間の良心を形成してきたのは、もつと広範な人びとの目であり、母親をはじめとする家族や友だちや地域社会や職業社会の連帯の目だったのである。ま

たある時期、ある社会では、独裁者や国家が神に代わって人びとの良心になった。もつともこの良心は、体制が一転するとたちまち崩壊してしまうような頼りないもので、伝統的な信仰によるそれとは比較にならないようにみえるが、機能としては同じである。

かつての家族制度や地域社会のあり方には、多くの儀式が組み込まれていた。冠婚葬祭や宗教上の行事がそれである。それらは考えてみると、人間がたがいに見たり見られたりすることの制度化であった。かつて人間は、幼児期から、成長の過程の節目において、親戚中の人びとに集まって祝福してもらえた。そこで人間は、自分が尊重されている存在であるという晴れがましさの感覚を得たのである。フロイトのいうように、幼児期に悪いことをすると権威ある父親からきびしくしかられたから良心が形成されたというのもほんとうかもしれないが、幼児期から少年期、青年期に多くの人びとに見守られて晴れがましい思いをくりかえし経験してきたということもまた、エ みつともないことをしたら恥ずかしいという気持ちの蓄積となつて、人間の良心の重要な構成要素になつたはずだ。

晴れがましさの一つのピークは、結婚式であろう。ふだんは平凡な青年と娘が、結婚のときには村のスターになった。昔の村の人たちにとって、村はほとんど世界だったから、それは世界的なスターになるようなものだろう。彼らは化粧し盛装して、行列をつくつて練り歩いて多くの人びとの注目を浴びた。本人たちが注目を浴びただけではない。その先導やら荷物の運送者を含めて、関係者一同が威儀を正して行列に参加し、晴れがましさを分かち合つた。宗教上の祭りというのも、神を讃えると同時に、参加者たちがそれぞれに司祭や進行係や演奏家や踊り手や行列の参加者などとして、老人から子どもまで、F タサイな役割を演じることによつて、たがいにたがいを晴れがましく見合う機会であつたといえよう。そこでは人びとは晴れがましく威儀を正し、ふだんよりいい格好をして、良き人間としての自分を他人にアピールしたのだ。そして良き人間として見られることを至福と感じたのだ。その気持ちが内面化し、他人に見られていないときにも良き人間としてふるまわなければ気がすまないという心性が心の深いところに定着すれば、それは良心だといえるだろう。

宗教が衰え、父親の権威も衰え、国家の神秘的権威もまた人は信じなくなつたとしても、四 人びとがたがいに見つめ合い祝福し

合うシステムの必要性がなくなることはない。むしろその重要性は増すであろう。

かつての言語教育で重要な位置を占めていたものに、あいさつのことばと祝いの口上があった。晴れの場での特別なことばづかいが重要視されていたのである。その根拠は以上のようなところにあったと思う。

(佐藤忠男『見ることと見られること』による)

問一 傍線部 A・B・C・D・E と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ジハツ

- ① 去年の覇者のイジを見せる
- ② キンジ値を計算して求める
- ③ 良好な関係をイジする
- ④ ジチ会の活動に参加する
- ⑤ 隆々とした筋肉をコジする

1

B アットウ

- ① 特定の思想にケイトウする
- ② イットウ兩断に叩き切る
- ③ 男女がドウトウの権利をもつ
- ④ シュウトウに用意する
- ⑤ 課題のケントウを進める

2

C ホソク

- ① 混乱がシュウソクする
- ② 顧客の要求をジュウソクする
- ③ 仕事の合間にキュウソクする
- ④ 野菜のソクセイ栽培
- ⑤ ガスの濃度をソクテイする

3

D ホウケン

- ① 恩師のケンザイを喜ぶ
- ② 時代をセツケンする
- ③ ケンシンのに介抱する
- ④ ケンキョな態度を示す
- ⑤ 高層ビルをケンセツする

4

E タサイ

- ① サイゲンのない欲望
- ② 手紙の返事をサイソクする
- ③ セイサイを欠く出来栄え
- ④ 新聞に写真がケイサイされる
- ⑤ センサイな感性

5

問二 空欄 ア ・ イ ・ ウ ・ エ に入る最も適当なものを次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

ア

- ①ならば
- ④そこで

- ②しかし
- ⑤なぜなら

- ③要するに

6

イ

- ①だが
- ④さて

- ②むしろ
- ⑤そのうえ

- ③つまり

7

ウ

- ①一方
- ④では

- ②そのうえ
- ⑤ただし

- ③にもかかわらず

8

エ

- ①だから
- ④さらに

- ②もつとも
- ⑤いずれにせよ

- ③しかも

9

問三 傍線部 (a)・(b) の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 了見が狭い

- ① 浅薄な考えである
- ② 人を見る目がない
- ③ 人との交際範囲が狭い
- ④ 人生経験が足りない
- ⑤ 周囲に引け目を感じる

10

(b) 晴れがましさの感覚

- ① 押しつけられている感覚
- ② 華やかで誇らしい感覚
- ③ 恥ずかしくて消え入りたくない感覚
- ④ 光栄なふりをする感覚
- ⑤ 悩みが解消された感覚

11

問四 傍線部 (一) 「宗教の信者にとっての良心」とは、どのようなものか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 非行を罰する法律や規則が存在するため、罰を恐れて悪いことはしないようにしようとする感覚
- ② 善行を受けた人が喜んでくれるのが自分の喜びでもあるため、進んで善い行いをしようとする感覚
- ③ 法律や規則で罰せられたり、人にほめられたりしなくても、行動の善悪は神が見ているという感覚
- ④ 死後、地獄に落とされるのを嫌がって、天国に行けるように渋々ながらも善をなそうとする感覚

12



問五 傍線部(二)「この説明も不充分である」とあるが、良心の源についてのフロイトによる説明が不十分な理由として、最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ① 父親の権威が幼児期に植え込まれて良心となると説明しているが、母親の方がこわい家庭も存在するから。
- ② 宗教の信者の場合、父親の権威が幼児期に植え込まれるのでは、良心の源が神と父親の二つになるから。
- ③ 権威が幼児期の心に植え込まれて良心となるという点で、父親と神を同一視するのは神に失礼であるから。
- ④ 父親なしで育った者や、権威主義的な父親の役割を果たす者がいない場合でも良心は形成されうるから。

問六 傍線部(三)「もっと広範な人びとの目」とあるが、筆者はなぜ、広範な人びとの目によって良心が形成されると考えるのか。理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ① 神や父親のような権威的存在によってではなく、むしろ地域社会、職業社会において人びとから評価され、人間性を監視されるような仕組みによって、悪いことをするまいという気になるから。
- ② 成長の節目ごとに周囲から祝福を受け、自分が尊重されると実感する経験をくりかえすことによって、みっともないことをしたら人びとに対して恥ずかしいという気持ちが蓄積するから。
- ③ ある時期、ある社会の独裁者や国家は、そのあり方によって国内の広範な人びとに連帯をうながし、神に代わって体制が良しとする主義主張が人びとの良心を規定するに至っていたから。
- ④ 人間は非行を罰する法律や規則なくしては悪い行為を思いとどまれない存在であるが、そのような法律や規則を定めるのは民主主義国家においては国民、つまり広範な人びとであるから。

問七 傍線部(四)「人びとがたがいに見つめ合い祝福し合うシステム」とは何のことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ① 冠婚葬祭や宗教行事の際、それにふさわしく威儀を正した姿であるか監視し合う社会
- ② 権威ある父親からきびしくしかられても、優しく子を慰めてくれる家族や地域社会
- ③ 良き人間としての人びとがたがいに見たり見られたりする冠婚葬祭や宗教上の行事
- ④ 神は道徳心の支柱であるため、神を讃え、信仰する人びとに幸いを願い合う行事

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

研究史などには興味はない読者が多いと思うけれども、いま『蒲団』研究が面白いことになってきているので、その話題から入ろうと思う。「近代文学研究のトレンド早わかり」でもあるので、これが少し長くなるのをお許し願いたい。

実は、売れない作家・竹中時雄が女学生の弟子に夢中になる田山花袋『蒲団』は、長らく近代文学史上最大の悪役として扱われて来た。近代文学を論じるなら、とりあえず『蒲団』を批判しておけばよかった時代さえあった。それは、文芸評論家の中村光夫が『風俗小説論』（河出書房、一九五〇・六）で『蒲団』をほぼ全否定したのが、「定説」となってしまったからである。

それを大雑把に言えば、こんな具合だった。<sup>(2)</sup>日本の自然主義文学は、一九〇六（明治三九）年にせつかく本格的な社会小説である島崎藤村『破戒』が刊行されたのに、翌年九月『新小説』にセンセーショナルな告白小説『蒲団』が発表されるや文壇の話題をカツさらい、以後、近代文学は『蒲団』の アばかりで、社会性を欠いた身边雑記のような私小説<sup>わたくし</sup>の方向へ進んでしまったと言うのである。ちなみに、「私小説」という言葉が一般化したのは大正期で、文学史の用語としては「ししよせつ」とは言わない。

そんな不幸な『蒲団』が注目されるようになったのは、柄谷行人がミシェル・フーコーの〈近代は、性的な言説が真実の言説とみなされる時代だ〉というテーゼに寄り添って論じたからである。柄谷行人は『蒲団』が告白小説であることは認めながら、告白すべき「内面」が先にあるのではなく、告白によって隠すべき「内面」が作られるのだという逆説を説いた。つまり、告白することによってそのことが告白しなければならないような隠すべきこととして認識されると言うわけだ。たとえば、そのことがヒミツでなかったとしてもだ。これをセンテ<sup>↑</sup>イに、『蒲団』についてこう言っている。

花袋の『蒲団』がなぜセンセーショナルに受けとられたのだろうか。それは、この作品のなかではじめて、「性」が書かれたからだ。つまり、それまでの日本文学における性とはまったく異質な性、<sup>(3)</sup>抑圧<sup>(3)</sup>によってはじめて存在させられた性が書か

れたのである。(「告白という制度」『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇・八、傍点原文)

「はじめて、「性」が書かれた」とは、『蒲団』によつてはじめて「性慾」が隠すべきもの、恥ずべきものとして書かれたという意味である。この柄谷行人の『蒲団』理解が起爆剤となつて、折からのセクソロジーの流行の波にも乗つて、みるみるうちに多くの『蒲団』論が書かれた。さらにフェミニズム批評の流行の波に乗つて、男が作った性の イ を攪乱する主体として「女学生」が注目され、またまた多くの『蒲団』論が書かれた。それをヨウリヨウよくまとめると、こうなる。

結局、芳子というキャラクターは、「女学生」の代表であり、表象(文化的な記号)なのだ。

つまり、時雄の欲望は、芳子の肉体ではなく、「女学生」という表象に向けられているのだ。(藤森清「ジェンダーと囲い込み」『ジェンダーの日本近代文学』中山和子・江種満子・藤森清編、翰林書房、一九九八・三)

一九五六(昭和三一)年に刊行された江藤淳の『夏目漱石』以来、近代小説の評価基準として、「他者」と出会ったか出会えなかつたかが持ち出されることが多い。ここでも、竹中時雄はいわば(記号としての女学生)に出会っただけで、(他者としての横山芳子)には出会っていないと批判的に説明しているのである。この説明を先の柄谷行人の『蒲団』への言及と接続すれば、竹中時雄は自分の「女学生」への「性慾」に出会っていただけだという説明になる。これを男性による女性の「抑圧」とするものが、フェミニズム批評お好みの結論だ。

そんなわけで、『蒲団』はいま論じるハードルがもっとも高い作品の一つになっている。この状況をブレイクスルーする論文が現れた。有元伸子(作者)をめぐる攻防——田山花袋「蒲団」と岡田美知代の小説——(『日本近代文学』第88集、二〇一三・五)である。『蒲団』はモデル小説である。竹中時雄Ⅱ田山花袋、横山芳子Ⅱ岡田美知代、田中秀夫Ⅱ永代静雄である。岡田美知代は、『蒲団』にもあるように文学作品を発表していた。それらを ウ に調べた有元伸子は、田山花袋と岡田美

知代との間でどちらが一つの経験の「作者」となるかをめぐって「攻防」があったと言う。結論部を引用しよう。

「蒲団」をめぐる田山花袋と岡田美知代の創作は、そうした一連の（作者）をめぐる男女の師弟の熾烈な攻防の先駆と見なされるべきであろう。女の書き物を抑圧し、搾取し、改変するテクスチュアル・ハラスメントによって成立した小説、――それが「蒲団」だったのである。

有元伸子が援用している、一目で間村俊一の装幀とわかる美しい本、ジョアナ・ラス『テクスチュアル・ハラスメント』（小谷真理編・訳、インスクリプト、二〇〇一・二）には、「女がものを書いたのなら、まずどう対処すべきか？ 第一の戦略としては、そもそも女性を書いたということを否定してしまえばよい」という強烈な言葉が書き込まれている。事実、訳者の小谷真理自身が（パートナーの英米文学者・巽孝之の代筆ではないか）というシュシの否定的発言を受けた、文章通りの「テクスチュアル・ハラスメント」の者でもあった。

有元論文は、その「テクスチュアル・ハラスメント」を近代文学研究に援用したもつとも刺激的な論文となるだろう。登場人物間の問題として議論されていた、竹中時雄による横山芳子への抑圧を、作品の外の現実世界へ持ち出したからである。この傾向は最近のトレンドでもあり、この論文によって『蒲団』研究はこれから新しいオを迎えそうな予感がする。

こういう研究状況を横目で睨みながら、これから『蒲団』について「誤配」小説として論じなければならないわけだ。

（石原千秋「なぜ『三四郎』は悲恋に終わるのか」による）

問一 傍線部A・B・Cと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ゼンテイ

- ① 作品をセンテイする
- ② 辞書をカイテイする
- ③ 裁判所にシュツテイする
- ④ 弱点をロテイする
- ⑤ 政策をテイゲンする

16

B ヨウリヨウ

- ① 政党のリヨウシュウと会う
- ② オンリヨウな性格
- ③ 天皇のゴリヨウに詣でる
- ④ リヨウヨウ施設に入る
- ⑤ 高いチンリヨウを徴収する

17

C シュシ

- ① 奨学金をシキユウする
- ② ユシ免職になる
- ③ チームのシキが上がる
- ④ 国連タイシを招く
- ⑤ 球界クツシの投手

18

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">ア</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">イ</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">ウ</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">エ</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">オ</div>
①模倣 ④抑圧	①情熱 ④規範	①適當 ④迅速	①担当 ④管理	①意識 ④論理
②否定 ⑤逆説	②思惑 ⑤反乱	②豊富 ⑤過大	②部外 ⑤偽善	②真相 ⑤援用
③改作	③表現	③詳細	③被害	③局面
<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">19</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">20</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">21</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">22</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 0 auto; display: flex; align-items: center; justify-content: center;">23</div>

問三 傍線部(一)「日本の自然主義文学」に関する説明として正しいものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。

24

25

- ①『蒲団』は登場人物間の問題として議論されていた竹中時雄による横山芳子への抑圧を、作品の外の現実世界へ持ち出した。
- ②研究史などに興味はない読者が多いかもしれないが、『蒲団』の研究だけは面白いものである。その話題について述べるべき文学思想である。
- ③自然主義文学は、竹中時雄はいわば〈記号としての女学生〉に出会っただけで、〈他者としての横山芳子〉には出会っていないと批判的に説明してきた。
- ④自然主義文学は、売れない作家・竹中時雄が女学生の弟子に夢中になる田山花袋『蒲団』を、長らく近代文学史上最大の悪役として扱ってきた。
- ⑤柄谷行人がミシェル・フーコーの〈近代は、性的な言説が真実の言説とみなされる時代だ〉というテーゼに寄り添って論じて以降、『蒲団』をめぐる論争に再び火がついた。
- ⑥『蒲団』の竹中時雄は自分の「女学生」への「性慾」に出会っただけであり、自然主義文学は、これを男性による女性の「抑圧」だと説明している。
- ⑦『風俗小説論』によると、自然主義文学は島崎藤村『破戒』の翌年『蒲団』が発表されて後は、社会性を欠いた身辺雑記のような私小説の方向へ進んでしまった。



問四 傍線部(二)「抑圧によってはじめて存在させられた性」に該当しないものを、次の①～⑧の中から三つ選べ。

26 · 27 · 28

- ① 女学生である芳子の肉体に宿る性
- ② 恥ずべきものとして書かれた性
- ③ 告白することによって表面化した性
- ④ それまでの日本文学が描いてきた性
- ⑤ 時雄の欲望として描かれた性
- ⑥ 過去の日本文学とは異質な性
- ⑦ 隠すべきこととして認識された性
- ⑧ 内面の真実として存在する性

問五 傍線部(三)「時雄の欲望は、芳子の肉体ではなく、「女学生」という表象に向けられている」を別の言い方で置き換えたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

- ① 竹中時雄は横山芳子の肉体には出会わなかったが、記号としての女学生である他者には出会うことができた。
- ② 竹中時雄は記号としての女学生である横山芳子に欲望を抱いたのであり、他者としての横山芳子には出会わなかった。
- ③ 横山芳子というキャラクターは単なる文化的な記号であったが、竹中時雄には女学生の表象である他者として認識された。
- ④ 田山花袋は岡田美知代の肉体に欲望を抱いたのだが、『蒲団』では横山芳子を描くことによってその欲望を隠している。
- ⑤ 竹中時雄の欲望はフェミニズム批評の流行の波に乗ったものであり、文化的な記号である他者へ向けられている。

問六 有元伸子の論文が、傍線部(四)「この状況をブレイクスルーする論文」である理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

- ① 『蒲団』は女の書き物を抑圧し、搾取し、改変するテクスチュアル・ハラズメントによって成立した小説であるから。
- ② 長らく近代文学史上最大の悪役として扱われて来た『蒲団』を、田山花袋と岡田美知代の創作として評価したから。
- ③ 『蒲団』は竹中時雄が自分の「性慾」に出会っていただけだと結論づけた、テクスチュアル・ハラズメントの論文だから。
- ④ 『蒲団』という作品を、いま論じるハードルがもつとも高い作品の一つにまで押し上げた、フェミニズム批評であるから。
- ⑤ 『蒲団』内部の登場人物間の問題とされていた、竹中時雄と横山芳子の関係を、作品の外の現実世界へ持ち出したから。

問七 傍線部(五)「テクスチャル・ハラズメント」の事例として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

31

- ① 男女の師弟が熾烈な攻防を繰り広げること。
- ② 女性が書いたものに対してそれを否定すること。
- ③ 作品内の抑圧を作品の外の現実世界へ持ち出すこと。
- ④ 論文をパートナーに代筆してもらうこと。
- ⑤ 否定的発言を近代文学研究に援用すること。

問八 田山花袋『蒲団』論の推移を筆者はどのように概観しているか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

32

- ① 近代文学を論じるなら、とりあえず『蒲団』を批判しておけばよかった時代を経て、社会性を欠いた身边雑記のような小説の方向へ進み、その後有元伸子らによって多くの『蒲団』論が書かれるようになった。
- ② 中村光夫が『風俗小説論』で『蒲団』をほぼ全否定し、ミシェル・フーコーが〈近代は、性的な言説が真実の言説とみなされる時代だ〉というテーゼを唱え、セクソロジーの流行の波にも乗って、多くの『蒲団』論が書かれた。
- ③ 本格的な社会小説である島崎藤村『破戒』が刊行されたのに、センセーショナルな告白小説『蒲団』が発表されて文壇の話題をさらってしまい、その後柄谷行人によって『蒲団』が告白小説であることを認められた。
- ④ 中村光夫の論によって近代文学史上最大の悪役として扱われて来たが、柄谷行人によりセクソロジー流行の波に乗って見直され、近年有元伸子の論によって作品の外の現実世界へ論点を移す、新たなトレンドの時代に入った。
- ⑤ 中村光夫の論によってほぼ全否定されたが、柄谷行人により「女学生」が注目されたことで論じるハードルがもつとも高い作品となり、その後有元伸子が男性による「抑圧」に注目してフェミニズム批評的な結論を導き出した。